

店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

日暮・松林遺跡 - 第10次調査 -

2016年5月

株式会社エブリイ
高松市教育委員会



例　言

- 1 本報告書は、店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、高松市多肥上町に所在する日暮・松林遺跡（ひぐらし・まつばやしいせき）の調査報告を収録した。
- 2 発掘調査地及び調査期間、調査面積は次のとおりである。

調査地 高松市多肥上町字日暮 1316-1 他
調査期間 平成 27 年 12 月 11 日～12 月 28 日
調査面積 619 m²
- 3 発掘調査及び整理作業は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 大嶋和則・同非常勤嘱託職員 杉原賢治が担当した。
- 4 本報告書の執筆・編集は、杉原が行った。
- 5 発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会が保管している。

凡　例

- 1 本報告書の挿図として、高松市都市計画図 2 万 5 千分の 1 「太田」・「多肥・仏生山」・「上林町」及び国土地理院地形図 2 万 5 千分の 1 「高松市南部」を一部改変して使用した。
- 2 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、方位は国土地理院第 VI 系の北を表す。
- 3 本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

SD : 溝 SP : ピット
- 4 挿図の縮尺は遺構の断面図が 1/40、出土遺物の実測図は 1/4 が基本である。
- 5 土層及び土器観察の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・一般財團法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 発掘調査の成果	4
第4章 まとめ	12

挿図目次

第1図 調査地位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	3
第3図 土層柱状図	4
第4図 SD1 土層断面図	4
第5図 調査地平面図 SD1・SD3 エレベーション図	5～6
第6図 SD2 土層断面図	7
第7図 SD3 土層断面図	8
第8図 SD4・SD5 土層断面図	8
第9図 SD6～SD11 土層断面図	10
第10図 遺物実測図	11
第11図 構分枝模式図	12
第12図 周辺調査位置図	13～14

挿表目次

第1表 整理作業工程表	1
第2表 出土遺物観察表	10

写真図版目次

図版1-1 調査前風景	(南から)	- 4 SD6 土層断面	(西から)
- 2 調査前風景	(北から)	- 5 SD7 完掘状況	(東から)
- 3 SD1・SD2 完掘状況	(南から)	- 6 SD7 土層断面	(東から)
- 4 SD1 土層断面	(北から)	- 7 SD8 完掘状況	(南から)
- 5 SD2 土層断面	(北から)	- 8 SD8 土層断面	(北から)
- 6 SD3 完掘状況	(北から)	図版3-1 SD1・SD2・SD10・SD11 完掘状況	(西から)
- 7 SD3 土層断面	(南から)	- 2 SD12 土層断面	(東から)
- 8 SD2・SD4 完掘状況	(西から)	- 3 遺物 ①	
図版2-1 SD4 土層断面	(北から)	- 4 遺物 ②	
- 2 SD5 完掘状況	(東から)	- 5 遺物 ③	
- 3 SD6 完掘状況	(西から)	- 6 遺物 ④	

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

株式会社エブリイによる当該地での店舗建設工事計画に際して、高松市教育委員会に対し埋蔵文化財包蔵地の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「日暮・松林遺跡」に隣接することから、任意の協力のもと、高松市教育委員会が平成27年4月20～21日に試掘調査を実施した。その結果、事業予定地の一部において弥生時代を中心とした時期の埋蔵文化財の包蔵状況を確認した。調査結果を香川県教育委員会に報告したところ、埋蔵文化財が確認された範囲について、周知の埋蔵文化財包蔵地「日暮・松林遺跡」の範囲として追加登録された。

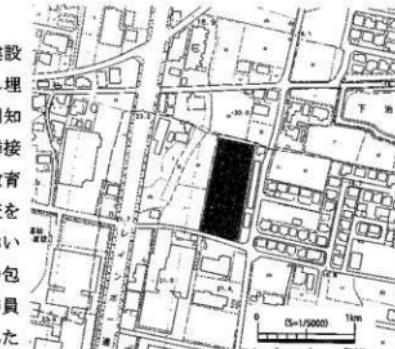
その後、工事に先立ち株式会社エブリイから平成27年8月31日付けで文化財保護法第93条に基づく発掘届出が提出され、高松市教育委員会から香川県教育委員会へ進達したところ、9月25日付けで工事着手前に発掘調査を行うよう行政指導があった。これを受けた高松市教育委員会は株式会社エブリイと協議を行い、発掘調査を実施し記録保存を行うことで合意し、平成27年11月20日付けで、埋蔵文化財調査協定書を締結した。これに基づき高松市教育委員会は発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

発掘調査は、平成27年12月11日より開始した。調査範囲は基礎及び地中梁を敷設する範囲を対象とした。調査は重機により遺構面直上まで掘削を行い、人力による遺構面検出後、人力により遺構埋土の掘削を行った。遺構平面図と断面図は1/20の縮尺で作図した。写真は35mmフィルムカメラを使用し、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムで撮影した。また、補助的にデジタルコンパクトカメラを用いて撮影を行った。同月28日に埋め戻しまでを行い、調査を終了した。整理作業は、以下の工程表で進めた。

第1表 整理作業工程表

	1月	2月	3月	4月	5月
接合・復元					
遺物実測・トレース					
遺構トレース					
図版レイアウト					
遺物写真撮影					
遺物収納					
原稿執筆・編集					



第1図 調査地位位置図 (S=1/5000)

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面する香川県のほぼ中央に位置する高松平野は、西側を五色台山塊、東側を立石山地に囲まれた東西20km・南北16kmの広さである。平野部には讃岐山脈に源を発する新川・春日川・詰田川・香東川・本津川等の河川が瀬戸内海に流れ込んでいる。東西の山塊は花崗岩塊の頂部に浸食を受けにくい安山岩が被るので、浸食解析から取り残されて山となったものである。

高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前には、現在の香川町大野付近から東へ分岐した後、石清尾山塊の南側から回り込んで平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の庵川直前の流路は、御坊川として今でもその名残をとどめている。

高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野での流入口で緩やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壤をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は涸れ川になることが多く、早くからため池を築造して水不足を解消してきた。山間の洪積台地と洪積層の境目に多くのため池が分布する。これらのため池は、年間1,000mm前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。また、今回の調査地である多肥地区周辺は、ため池に加えて出水（ですい）と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。調査地周辺では、栗木出水、平井出水、鈴木出水等が見られる。

第2節 歴史的環境

高松平野では大規模開発事業（高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）の事前調査により、遺跡数が飛躍的に増大してきた。特に、今回の調査地の多肥上町松林周辺においては、香川県立高松桜井高等学校や都市計画道路の建設等に伴う発掘調査が行われ、面的に遺跡の広がりや内容が判明している地域である。

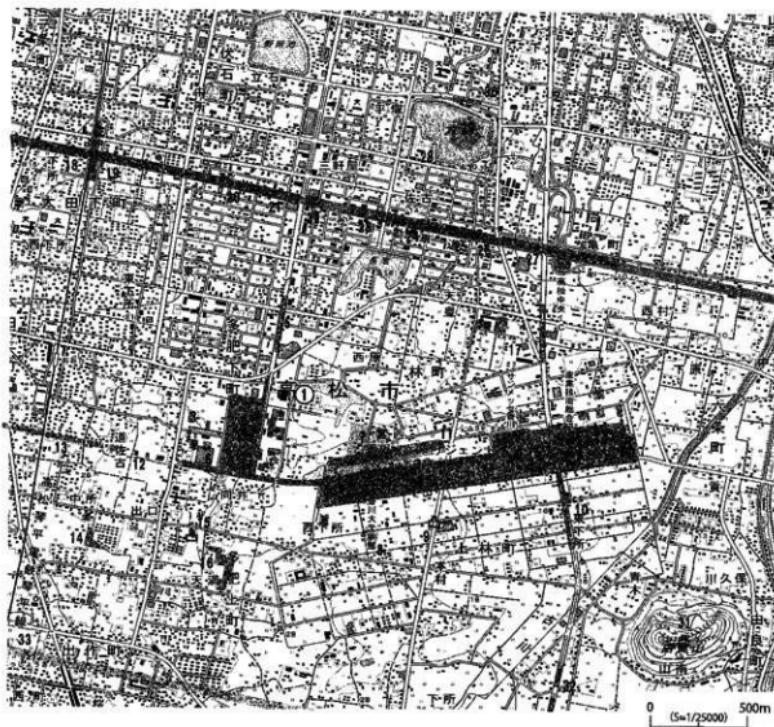
旧石器・縄文時代の遺跡は今回の調査地周辺では知られていない。松林遺跡や多肥松林遺跡の旧河道中からわずかに縄文時代晚期の遺物が出土している程度である。当該期の遺跡は高松平野でもほとんど知られておらず、不明な点が多い。

弥生時代前期になると、多肥松林遺跡で溝が検出されているほか、松林遺跡では集石遺構が見られる。さらに空港跡地遺跡では、前期末～中期初頭の土坑が多数発掘されており、集落が存在した可能性がある。中期中葉になると、香川県立高松桜井高等学校の中心部を南から北に流れる自然河道が埋没を始める。この流路から土器とともに鳥形木製品、木製農具等が出土している。流路の两岸には掘立柱建物や堅穴住居が営まれており、特に流路東側の集落域は日暮・松林遺跡まで広がっている。この時期には多肥松林遺跡の北西部において洪水砂層、松林遺跡において地

震の液状化現象である噴出が認められ、自然災害があったことを物語っている。中期後半～後半前期には遺構・遺物ともほとんど見られない。後期中葉には、灌漑水路が多数掘削されている。後期後半には日暮・松林遺跡において竪穴住居が多数検出されている。空港跡地遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の前方後方形及び前方後円形の周溝墓が確認されている。

古墳時代には、日暮・松林遺跡や多肥宮尻遺跡においては、空港跡地遺跡で中期の竪穴住居が確認されており、集落が存在している。中期末～後期前半の土器や木製品を包含する自然河道が検出されている。平安時代には、周辺の自然河道の埋没がほぼ完了しており、多肥松林遺跡において掘立柱建物や溝が掘削されており、溝から斎串が多量に出土している。

中・近世においては、条里地割の溝や掘立柱建物が検出されている。松林遺跡では、香川郡の一条と二条の条界溝が検出されている。日暮・松林遺跡においては多量の瓦器柄が出土している。



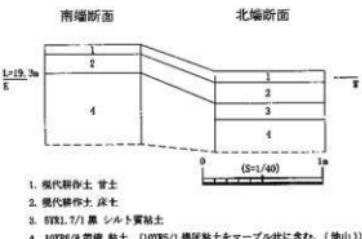
- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-----------|---------|-----------|---------|-----------|-----------------|---------|---------|----------|-------------|------------|-----------|--------------|----------|----------|-----------|-----------|--------------|----------|----------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|-----------|------------------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|
| ① 日暮・松林遺跡 | 2. 多肥松林遺跡 | 3. 松林遺跡 | 4. 空港跡地遺跡 | 5. 回原遺跡 | 6. 多肥宮尻遺跡 | 7. 弘福寺領田園南地区比定地 | 8. 拝師魔寺 | 9. 上林城跡 | 10. 上林遺跡 | 11. 宮西・一角遺跡 | 12. 多肥平塚遺跡 | 13. 北原西遺跡 | 14. 井手上・中所遺跡 | 15. 高木城跡 | 16. 野郷遺跡 | 17. 林宗高遺跡 | 18. 上天神遺跡 | 19. 太田下・須川遺跡 | 20. 菊股遺跡 | 21. 居石遺跡 | 22. 手平東II遺跡 | 23. 井手東I遺跡 | 24. 岩・長池Ⅱ跡 | 25. 岩・長池I遺跡 | 26. 岩・松ノ木遺跡 | 27. 林坊城遺跡 | 28. 弘福寺領田園北地区比定地 | 29. 大池遺跡 | 30. 上西原遺跡 | 31. 由良山城跡 | 32. 北野遺跡 | 33. 旧南海道跡 |
|-----------|-----------|---------|-----------|---------|-----------|-----------------|---------|---------|----------|-------------|------------|-----------|--------------|----------|----------|-----------|-----------|--------------|----------|----------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|-----------|------------------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|

第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/25000)

第3章 発掘調査の成果

基本層序（第3図）

当該地域は調査前は水田で、北半分が一段下がっていたことから、北に向けて下る地形である。基本層序は概ね4層に分層できる。上位の1～2層は現代耕作土、4層の黄橙色粘土層が地山で遭検査面である。北端では地山の上層に3層の黒色シルト質粘土層が見られ、調査で検出した溝の最上層の埋土と同じ土質である。

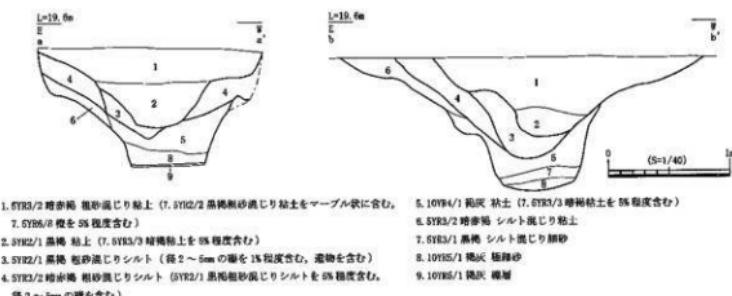


第3図 土層柱状図(S=1/40)

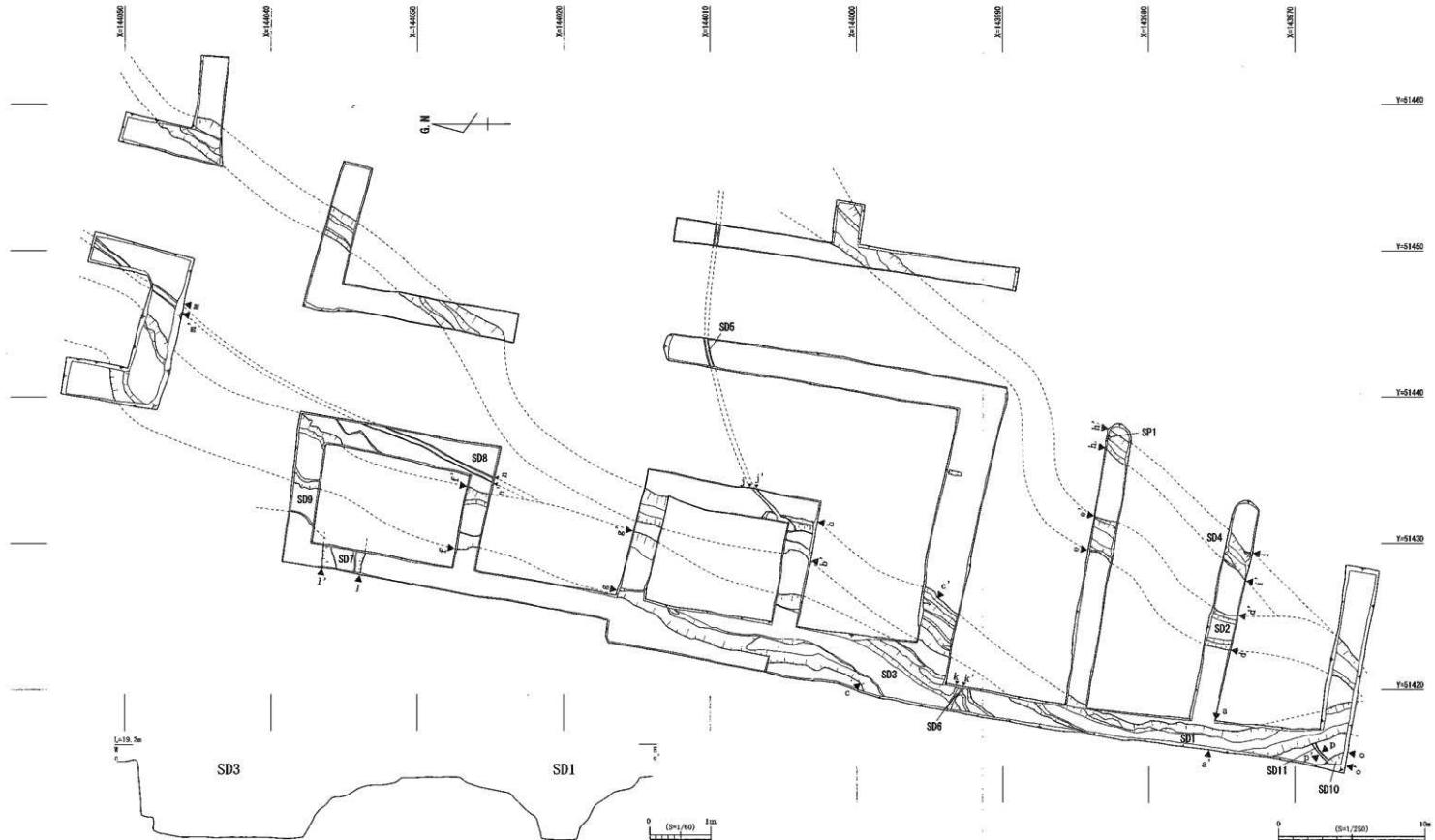
SD1（第4・10図）

調査区の南西から北東にかけて検出した溝で、幅1.5～3.0m、深さ0.6～0.9mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は9層に分層できる。第1層は黒褐色粗砂混じり粘土を含む暗赤褐色粗砂混じり粘土、第2層は暗褐色粘土混じり黒褐色粘土、第3層は黒褐色粗砂混じりシルト、第4層は黒褐色粗砂混じりシルトを含む暗赤褐色粗砂混じりシルト、第5層は暗褐色粘土を含む褐灰色粘土、第6層は暗褐色シルト混じり粘土、第7層は黒褐色シルト混じり粘土、第8層は褐灰色極細砂で流路堆積と考えられ、第9層は褐灰色硬層である。堆積状況から少なくとも3回の掘り直しが認められる。第5～9層まで埋没した後、1回目の掘り直しが行われ、第4層が埋没した。その後、2回目の掘り直しが行われた後に3層が埋没した。さらに3回目の掘り直しが行われた後に第1・2層が堆積し、溝としての機能を失ったものと考えられる。

図化できる遺物は6点出土した。第10図1～5は上層出土の遺物である。1は弥生土器の鉢である。外面はヨコヘラケズリ、内面はタテハケが見られる。2は弥生土器の甕で、外面はタテヘラミガキ、内面はタテヘラケズリである。3は弥生土器の片口鉢である。外面はヨコヘラケズリのち下半が分割ヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキである。底部の丸底化が図られていることから弥生時代後期後半のものと考えられる。4は土師質土器の壺の頸部で口縁部に向けて外傾している。5・6は弥生土器の高杯の脚部である。磨滅が著しいが、5の内面には絞り目が見られる。



第4図 SD1 土層断面図(S=1/40)

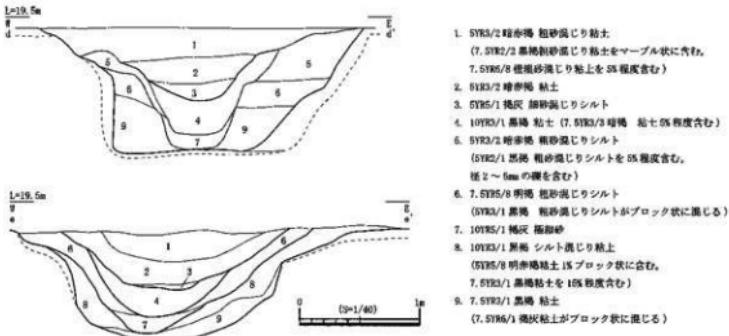


第5図 調査地平面図(S=1/250) SD1-SD3 エレベーション図(S=1/60)

SD2 (第6・10図)

調査区の南西から東側中央部にかけて検出した溝で、幅約1.5～2.7m、深さ0.7～0.9mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は9層に分層できる。第1層は黒褐色粗砂混じり粘土を含む暗赤褐色粗砂混じり粘土、第2層は暗赤褐色粘土、第3層は褐灰色細砂混じりシルト、第4層は暗褐色粘土を含む黒褐色粘土、第5層は黒褐色粗砂混じりシルトを含む暗赤褐色粗砂混じりシルト、第6層は黒褐色粗砂混じりシルトを含む明褐色粗砂混じりシルト、第7層は褐灰色極細砂、第8層が明赤褐色粘土を含む黒褐色シルト混じり粘土、第9層は褐灰色粘土が混じる黒褐色粘土である。堆積状況から少なくとも3回の掘り直しが認められる。第8・9層が埋没した後、1回目の掘り直しが行われ、第6・7層が埋没した。その後、2回目の掘り直しが行われ、4・5層が埋没した。さらに、3回目の掘り直しが行われた後に第1～3層が堆積した後、溝としての機能を失ったものと考えられる。

図化できる遺物は9点出土した。第10図7～14は中層出土の遺物である。7～12は土師質土器の碗である。内湾する体部に外反する口縁端部を持ち、11・12は平高台である。10は内外面ともに工具痕が残る。いずれも回転ナデであるが、11・12は内面に指オサエが見られる。7～12は10世紀の遺物と考えられる。13は弥生土器の二重口縁壺である。くの字に折れる頸部からやや外反しながら立ち上がる口縁部をもつ。外面はヨコハケ、内面は指オサエが見られる。14は土師器の壺である。外面は多方向のナデ、内面は指オサエが見られる。15は下層から出土した木製品である。中央上辺から切り込みのような加工痕が見られる。用途は不明である。



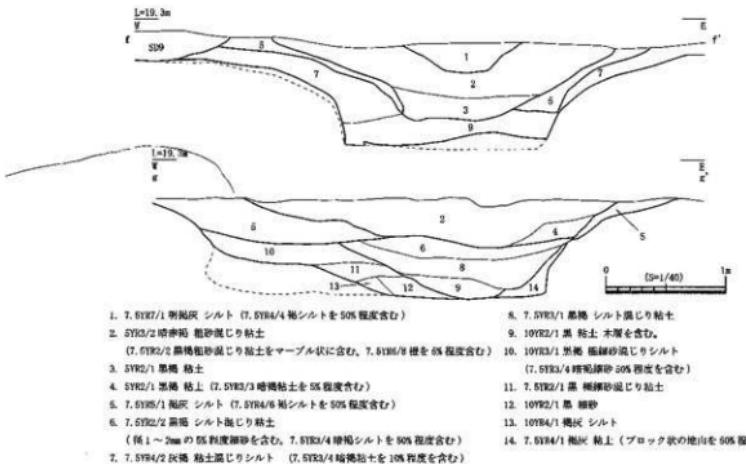
第6図 SD2 土層断面図 (S=1/40)

SD3 (第7・10図)

調査区の南西から北側中央部にかけて検出した溝である。幅3.3～5.0m、深さ0.7～1.1mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は14層に分層できる。第1層は褐色シルトを含む明褐色シルト、第2層が黒赤褐色粗砂混じり粘土を含む暗赤褐色粗砂混じり粘土、第3層は黒褐色粘土、第4層は暗褐色シルトを含む黒褐色シルト、第5層は褐色シルトを含む褐灰色シルト、第6層が暗褐色シルトを含む黒褐色シルト混じり粘土、第7層が暗褐色粘土を含む灰褐色粘土混じりシルト、第8層は黒褐色シルト混じり粘土、第9層が木屑片を含む黒色粘土、第10層は暗褐色細砂を含む黒褐色極細砂混じりシルト、第11層が黒色極細砂混じり粘土、第12層は黒色細砂、

第13層が褐色シルト、第14層は地山ブロックを含む褐色粘土である。堆積状況から少なくとも3回もしくは4回の掘り直しが認められる。第10~14層まで埋没した後、1回目の掘り直しが行われ第6~9層まで埋没したその後、2回目の掘り直しが行われ第5層まで埋没した。さらに3回目の掘り直しが行われ第2~4層が埋没した。最後に4回目の掘り直しが行われた後に第1層が堆積し、溝としての機能を失ったものと考えられる。

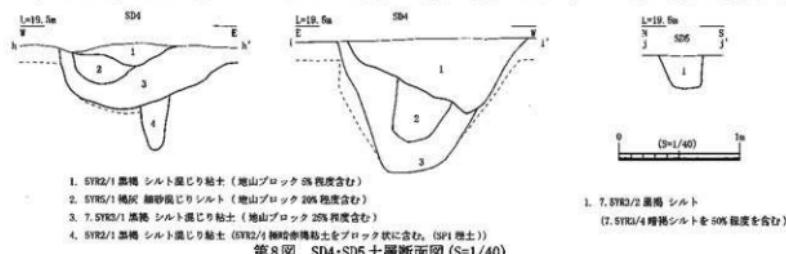
図化できる遺物は2点出土した。第10図16は下層から出土した弥生土器の壺である。外面はハケ、内面はタテヘラケズリが見られ、弥生時代中期の遺物と考えられる。17は下層から出土した木製品の杭で、下部に加工痕が見られる。遺物が少量であり、遺構の時代は不明である。



第7図 SD3 土層断面図 (S=1/40)

SD4 (第8図)

調査区の南西部において検出した溝で、幅1.2~1.5m、深さ0.7mであり、北東に向かう遺構の深度が浅くなっている。断面形状はU字形を呈し、埋土は3層に分層できる。第1層は黒褐色シルト混じり粘土、第2層が褐色シルト混じり粘土、第3層が黒褐色シルト混じり粘土である。堆積状況から少なくとも2回の掘り直しが認められる。第3層が埋没した後、1回目の掘り直しが行われ第2層まで埋没した。その後2回目の掘り直しが行われた後に、第1層が堆積したものと考えられる。遺物は出土していないため遺構の時期は不明であるが、SD1と同時期の遺構と考



第8図 SD4-SD5 土層断面図 (S=1/40)

えられる。

SD5 (第8図)

調査区の中央部から東側中央部に向けて検出したSD1から分岐する溝で、幅0.2～0.3m、深さ0.3mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は暗褐色シルト混じり黒褐色シルトである。分岐部分に切り合いが見られないことから、SD1から分水する溝と考えられる。遺物は出土していないため造構の時期は不明であるが、SD1と同時期の造構と考えられる。

SD6 (第9・10図)

SD3から分岐する形で、調査区の西部中央において一部検出した溝で、幅0.4m、深さ0.3mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は6層に分層できる。第1・2層は黒褐色粗砂混じりシルト、第3層が暗褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルト混じり粘土、第4層は地山ブロックを含む褐灰色シルト混じり粘土、第5層が地山ブロックを含む褐灰色粘土、第6層は褐灰色細砂で流路堆積と考えられる。分岐部分に切り合いが見られないことからSD3から分水する溝と考えられる。

図化できる遺物は1点出土した。第10図18は弥生土器の甕の底部である。遺物が少量であり造構の時期は不明であるが、SD3と同時期の造構と考えられる。

SD7 (第9図)

調査区の南西から北西部で検出した溝で、幅2.1～3.1m、深さ0.1mを測る。断面形状は逆台形を呈し埋土は2層に分層できる。第1層が暗褐色粘土を含む黒褐色粘土、第2層が地山ブロックを含む灰褐色粘土である。遺物は出土していないため時期は不明である。

SD8 (第9図)

調査区の中央で検出した溝で、幅0.3～0.5m、深さ0.2mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は3層に分層できる。第1層は黒褐色シルト質粘土、第2層が黒褐色粘土、第3層は流路堆積と考えられる褐灰色粗砂である。遺物は出土していないため、造構の時期は不明である。

SD9 (第9図)

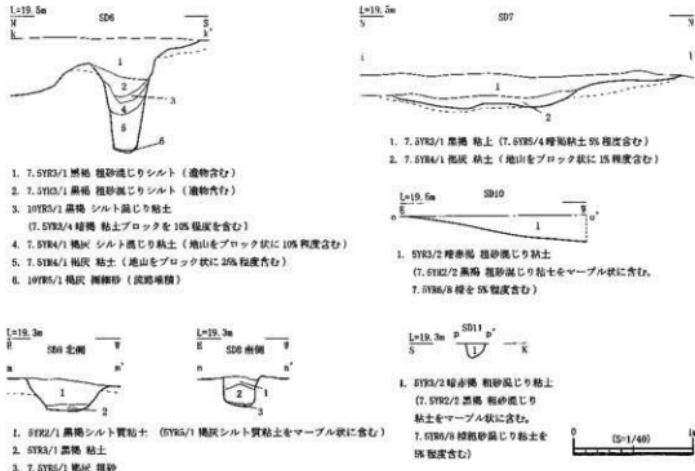
調査区の北部で一部検出した溝である。検出できた幅は約1.3m、深さ0.2mを測る。埋土は褐灰色シルトである。遺物は出土していないが、SD3を切っており埋土が他の造構と異なることや、周辺の調査事例から近世以降の造構と考えられる。

SD10 (第9図)

調査区の南西端において一部検出した溝状造構である。大半が調査区外にあると考えられ、検出できた幅は1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は暗赤褐色及び黒褐色がマーブル状に混じる粗砂混じり粘土である。遺物は出土していないため、時期は不明である。

SD11 (第9図)

SD1及びSD10を繋ぐ溝で、幅0.3m、深さ0.1mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は暗赤褐色粗砂混じり粘土層である。分岐部分に切り合いが見られないため、SD1から分水する溝と考えられる。遺物が出土していないことから造構の時期は不明であるが、SD1と同時期の造構と考えられる。



第9図 SD6～SD11 土層断面図 (S=1/40)

第2表 出土遺物観察表

1) 土器

件文 番号	出土 遺物名	種類	部品	測量 (cm) (推定値) [標準高]	文様・柄模		外側	内側	色調	出土	焼成	備考
					口徑	直徑	高さ					
1.SD1	陶土土器	杯	杯	(33.0)	—	(5.5)	ヨコヘラミガラスリ・招き手	タテハケ	7.SYR 6/6 横 SYR 5/8 横	褐 石英・長石 有光沢	良好	
2.SD1	陶土土器	甌	甌	—	—	(6.1)	タテヘラミガラスリ	タテヘラミガラスリ	7.SYR 6/3 にぶい 横 7.SYR 5/2 深灰	青 石英・長石 無光沢	良	
3.SD1	陶土土器	片口碗	片口碗	(33.2)	—	(16.8)	ヨコヘラミガラスリ・分割ヘラミ	ヨコヘラミガラスリ	7.SYR 5/2 横 SYR 6/3 にぶい	青 石英・長石 無光沢	良	内側上部に ハケ状工具
4.SD1	土師質土器	碗	碗	—	—	(4.8)	網底	網底	7.SYR 6/6 横 SYR 6/4 にぶい	青 石英・長石	良	
5.SD1	陶土土器	高杯	高杯	—	—	(5.3)	網底	網底	7.SYR 6/2 深灰 SYR 5/4 深灰	褐 石英・長石 無光沢	良好	
6.SD1	陶土土器	高杯	高杯	—	—	(5.3)	網底	網底	7.SYR 6/2 深灰 SYR 5/4 深灰	褐 石英・長石 無光沢	良好	
7.SD2	土師質土器	碗	碗	—	—	(4.1)	凹輪ナデ	凹輪ナデ	7.SYR 7/3 にぶい 横 7.SYR 7/4 にぶい	青 石英・長石	良	
8.SD2	土師質土器	碗	碗	—	—	(3.2)	凹輪ナデ	凹輪ナデ	7.SYR 7/4 にぶい 横	青 石英・長石	良	
9.SD2	土師質土器	碗	碗	—	—	(2.7)	凹輪ナデ	凹輪ナデ	10SYR 6/6 深灰 2.SYR 6/2 深灰	褐 石英・長石	良	
10.SD2	土師質土器	碗	碗	(33.0)	—	(3.3)	凹輪ナデ	凹輪ナデ	10SYR 7/2 にぶい 横 2.SYR 7/1 深灰	青 石英・長石 無光沢	良	工具痕有
11.SD2	土師質土器	碗	碗	(33.0) (11.0)	(6.7)	—	凹輪ナデ・招き手	凹輪ナデ・招き手	10SYR 7/2 にぶい 横 7.SYR 8/4 深灰	青 石英・長石 無光沢	良	
12.SD2	土師質土器	碗	碗	—	(9.0)	(3.1)	凹輪ナデ	凹輪ナデ	10SYR 7/2 にぶい 横 7.SYR 7/4 にぶい	青 石英・長石	良	
13.SD2	陶土土器	二重口 盤	二重口 盤	(17.8)	—	(2.7)	ヨコハケ	ヨコハケのナ ダ・招き手	10SYR 6/6 にぶい 横 10SYR 5/3 にぶい 横	青 石英・長石 無光沢	良	
14.SD2	土師器	壺	壺	—	—	(6.7)	タテ方向のナ ダ	招き手	10SYR 7/3 にぶい 横 7.SYR 6/4 にぶい	青 石英・長石	良	
15.SD2	陶土土器	甌	甌	—	—	(5.7)	ハケ	タテヘラミガラスリ	7.SYR 6/4 にぶい 横	褐 石英・長石 無光沢	良好	
16.SD2	陶土土器	甌	甌	—	—	(2.7)	網底	網底	2.SYR 6/1 深灰	青 石英・長石	良	
17.SD2	陶土土器	甌	甌	(38.6)	(5.7)	(4.7)	網底	網底	2.SYR 6/1 深灰	青 石英・長石	良	

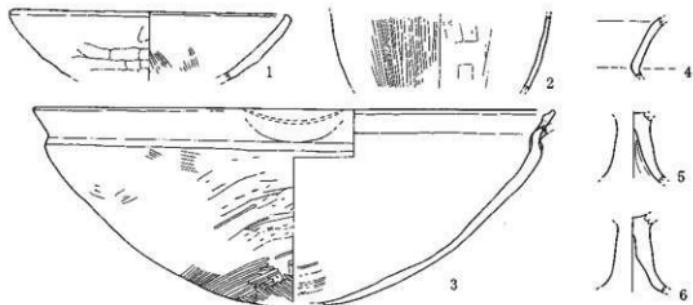
II) 木製品

件文 番号	出土 遺物名	器種	形状 (cm) (標準値)			備考
			長径	幅	厚さ	
15.SD2	木製木製品	—	22.35	4.7	3.2	加工痕有
17.SD2	木製	—	(38.6)	(5.7)	(4.7)	加工痕有

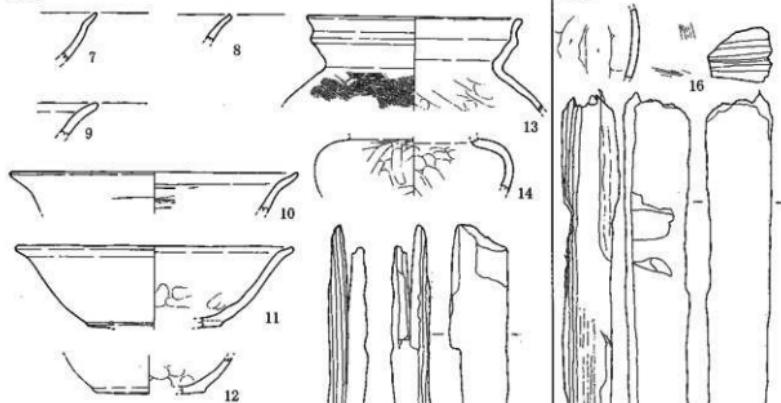
SP1 (第8図)

調査区において検出したピットである。平面形状は梢円形で、径 0.25 ~ 0.4 m、深さ 0.5 m を測る。埋土は極暗赤褐色粘土をブロック状に含む黒褐色シルト混じり粘土である。遺物は出土していないため遺構の時期は不明であるが、SD4 に切られていることから SD4 以前の掘削時期の可能性又は SD4 に伴う施設と考えられる。

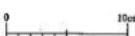
SD-1



SD-2



SD-6



第10図 遺物実測図 (S=1/4)

第4章　まとめ

今回の調査では溝11条とピット1基が確認できた。SD1～6・8・9・11は、区画溝ではなく灌漑用の水路と考えられる。SD1～4の4条は、他に比べ規模が大きく深い。出土遺物は極少量ではあるが、SD1・3・4から弥生時代中期～後期の遺物が出土しており、SD2からは弥生土器とともに10世紀代の遺物が出土している。掘り直しの跡がいずれの溝からもうかがえることから、SD2は古代以降、SD1・3・4は時期を確定する遺物が出土しなかつたことから、弥生時代後期以降に再掘削が行われたと考えられる。

SD5・6・8・11は、規模も小さいことから規模の大きい溝に分水するための水路であると考えられる。SD7は他の溝と異なり浅いことから、上記の溝群とは性格が異なる可能性がある。SD9は周辺の調査成果から近世以降の遺構と考えられる。

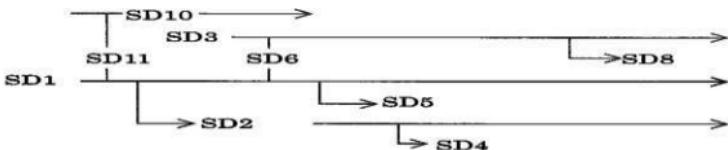
全面発掘を行っていないため、溝の分岐の確認が取れず推測となるが、第11図のように分岐していると考えられる。

周辺地域においては、多くの調査が実施されており、土地利用の変遷についても既に大枠が示されている（大嶋編2005）。ここでは、本調査の近隣の発掘事例との関連性について述べる。

近隣の発掘事例は、第12図の8・11・15である。いずれの調査でも溝が検出されており、出土遺物から溝が機能していた時代は弥生時代後期～古代である。

本調査地において検出した遺構からも同様の時期の遺物が出土していることから、周辺地域と同じく弥生時代後期～古代に属する一連の遺構と考えられる。しかし、周辺の調査地と比べると溝以外にはピット1基のみの検出であり、生活痕跡が極めて希薄であることから集落の縁辺部であると考えられる。

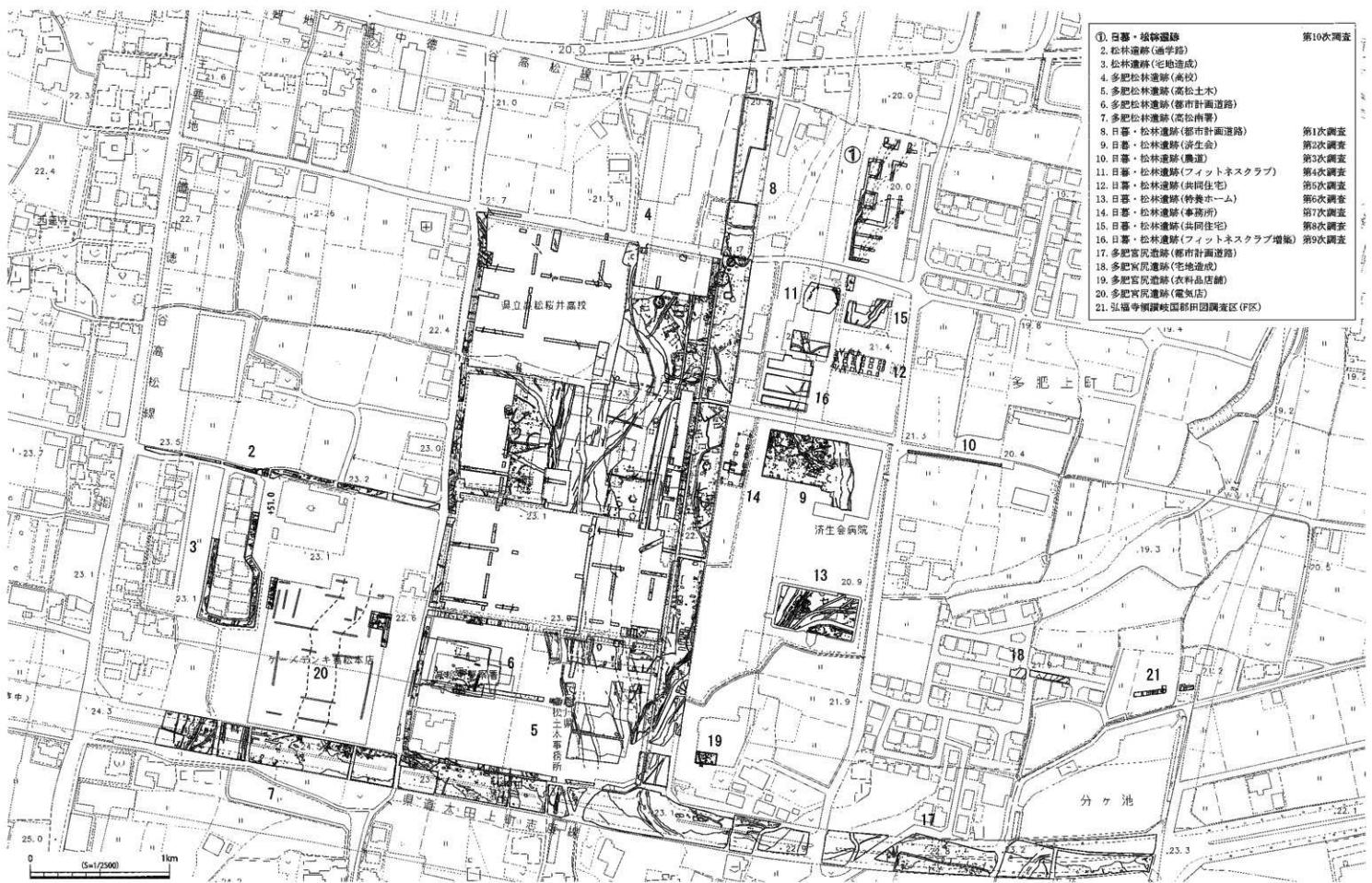
また、一連の遺構と考えるのであるなら、本調査の南側隣接地で行われた第12図の15で検出された北に延びるSD001は深さ及び規模ともに本調査のSD1と酷似していることから、SD001の延伸部分がSD1となる可能性が高い。



第11図　溝分岐模式図

参考文献

- 大嶋和則編 2006『日暮・松林遺跡（清水会特養ホーム）』高松市教育委員会
小川賀義編 2005『フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』日暮・松林遺跡（フィットネスクラブ）』高松市教育委員会
佐藤竜馬編 2016『鐵砲における古代～中世時編年をめぐる基礎作業（I）9世紀後葉～11世紀前葉の住居跡復元』『香川県埋蔵文化財センター年報 平成26年度』香川県埋蔵文化財センター
山本英之・中西武也編 1997『都市計画道路福岡市北上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』日暮・松林遺跡』高松市教育委員会
後藤誠編 2007『共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』日暮・松林遺跡（共同住宅）』高松市教育委員会





-1 調査前風景(南から)



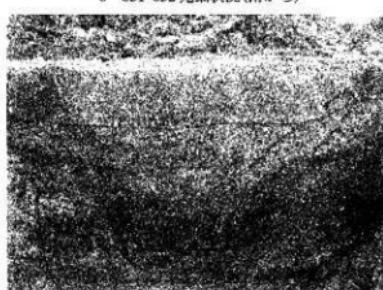
-2 調査前風景(北から)



-3 SD1・SD2 完掘状況(南から)



-4 SD1 土層断面(北から)



-5 SD2 土層断面(北から)



-6 SD3 完掘状況(北から)

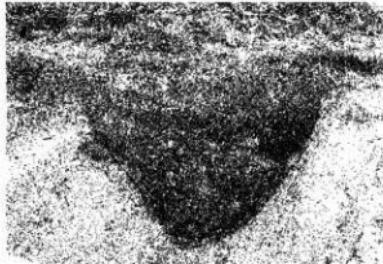


-7 SD3 土層断面(南から)

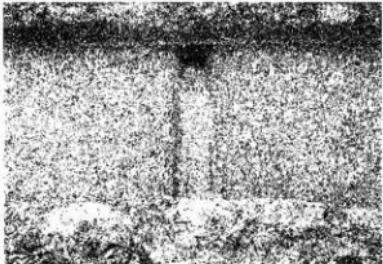


-8 SD2・SD4 完掘状況(西から)

写真図版
2



-1 SD4 土層断面(北から)



-2 SD5 完掘状況(東から)



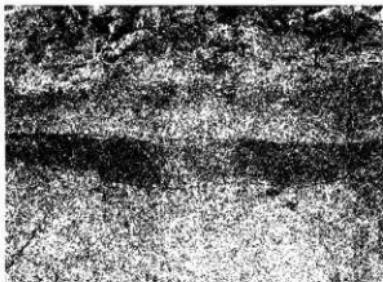
-3 SD6 完掘状況(西から)



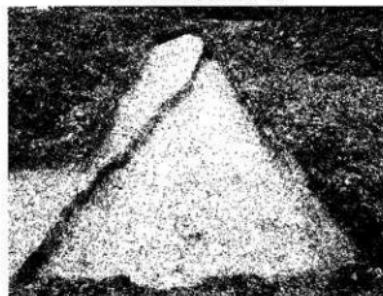
-4 SD6 土層断面(西から)



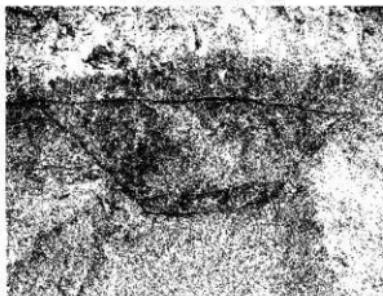
-5 SD7 完掘状況(東から)



-6 SD7 土層断面(東から)



-7 SD8 完掘状況(南から)



-8 SD8 土層断面(北から)



-1 SD1-SD2-SD10-SD11発掘状況(西から)



-2 SD12 土層断面(東から)

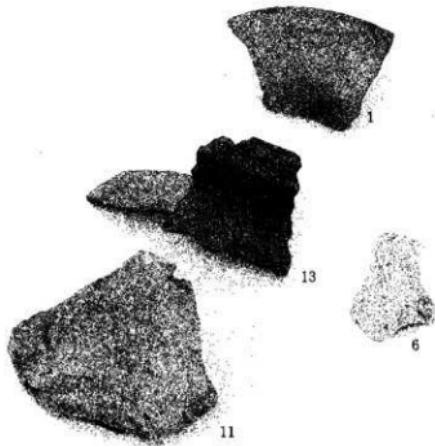


3

-3 遺物①

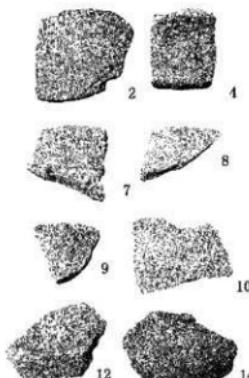


-4 遺物②



11

-5 遺物③



-6 遺物④

6

13

11

1

2

4

7

8

9

10

12

14

報告書抄録

ふりがな	ひぐらし・まつばやしいせき -だいじゅうじちょうさ-						
書名	日暮・松林遺跡 -第10次調査-						
副書名	店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第173集						
編著者名	杉原 賢治						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660						
発行年月日	西暦 2016年5月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度	東経 度	発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
ひぐらし・まつばやしいせき 日暮・松林遺跡	香川県 たかみやけん 高松市 たかまつし 多肥上町 たひじょうまち 字日暮 あひぐらし 1316-1他	37201	34° 17' 50"	134° 03' 32"	2015.12.11 ～ 2015.12.28	619 m ²	店舗建設 工事
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項		
日暮・松林遺跡	集落跡	弥古代 ビ	溝 ツ	弥生土器 土師質土器			
要約	<p>溝11条を確認することができた。溝からは弥生時代後期～古代の遺物が出土し、周辺の調査地と同じく弥生時代後期～古代に属する一連の遺構と考えられる。SD2からは弥生土器と古代の遺物が共伴しているが、調査成果を踏まえると再掘削が行われたのは古代であると考えられる。</p> <p>また、本調査地は周辺の調査成果と比べると生活痕跡が乏しいことから、集落の縁辺部に位置することを確認することができた。</p>						

店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

日暮・松林遺跡 -第10次調査-

平成28年5月31日

編集	高松市教育委員会 高松市番町一丁目8番15号
発行	株式会社 エブリイ 高松市教育委員会
印刷	有限会社 中央ファーリング